

教育実践研究における 「研究仮説」を考える



名古屋大学教育学部教授

大谷 尚

今日、学校における教育実践研究の際に、「研究仮説」を設定することが広く行われている。本稿では、これについて若干の実態把握を行った上で、その問題点、背景等を検討し、教育実践研究の新たなあり方を考える。

1. 教育実践研究における「研究仮説」設定の現状について

(1) 「研究仮説」の一般的な形式

まず、研究仮説の記述形式を見ておく。仮説の設定方法を典型的に規定しているA県B小学校の研究紀要(1993)を参考にすると、「〇〇において、△△をすることで、□□になるだろう」と記述すると規定しており、〇〇は「研究の対象」(研究の範囲や領域、学習内容、素材等)、△△は「研究方法」(研究の具体的方途)、□□は「研究結果の予測」(願う生徒の姿)としている。

(2) 「研究仮説」に対する筆者の最初の疑問

筆者はこれに、いくつかの疑問を感じてきた。それは以下のとおりである。

第1に、「△△をすることで□□になるだろう」とは、人間を対象とする教育という営みでは、そもそもあまりにも単純すぎる命題であり、実践者自身もそのように考えているとはどうしても思えないことである。

第2に、仮説の条件節と帰結節の関係がいまいであるとか、一方の内容が他方に含まれるとか、

同値な内容を条件と帰結の両方に記述しているなど、記述に論理的な問題があるものが多いことである。

第3に、本来「研究仮説」とは、研究において正しいと検証されて正当な理論になり、蓄積・体系化されるべきものであるのに、これらの仮説は、例外なく検証されないことである。

(3) 「研究仮説」の普及の時期ときっかけ

そこでまずこれが、いつごろどのようなきっかけで普及し始めたかについて、愛知県内のいくつかの市教育委員会で指導課長等の経験がある校長らに聞き取り調査を行ったが、明確な回答は得られなかった。ただし、「自分たちの採用時(25年程前)には無かったが、最近は一般的だ」という点が一致していた。

そこで、愛知県C市の教育研究所のご好意で、そこに保管してある「C市教委・教育研究所研究紀要」(1966年～1998年の33年分。ただ1967年は欠損)中の優秀賞受賞論文を調査した。その結果以下のことがわかった。

- ・「研究仮説」の設定は、1975年度までは全くなく、1976年度から出現する。

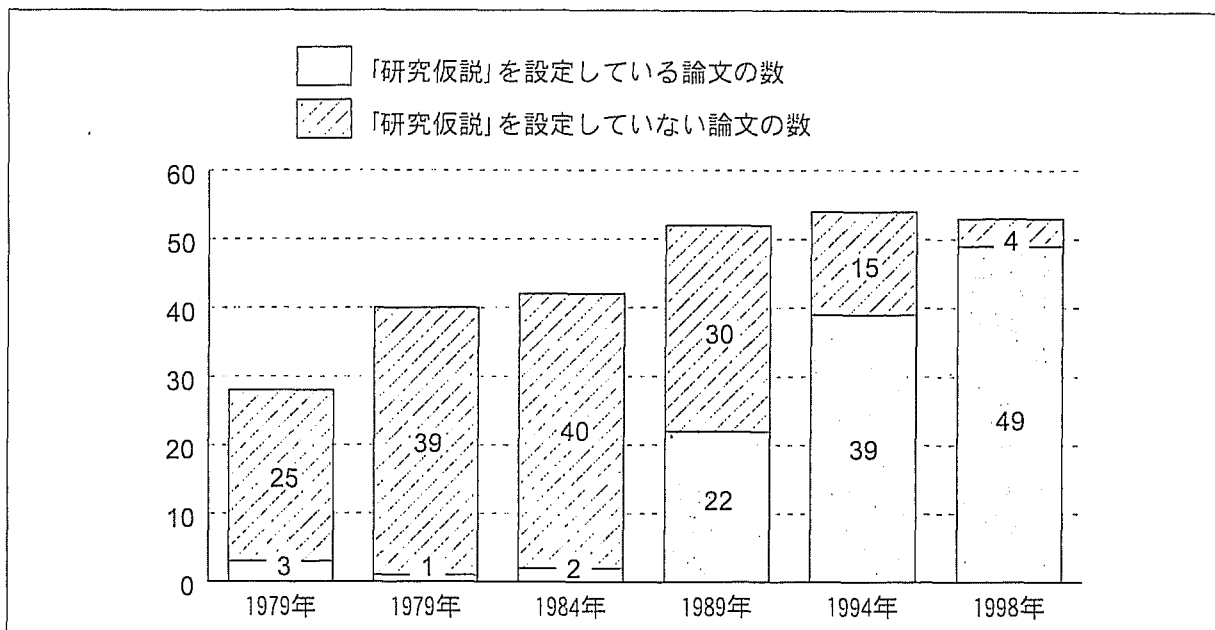


図1 C市研究紀要優秀論文中の「研究仮説」の設定

- ・出現の時期は、それまで盛んだった「行動目標の記述」、「プログラム学習」、「フローチャートによる指導案」等の教育工学的な手法が減少する頃である。
- ・当初は「〇〇である」という形式（例「ノートの分析から思考の変容が評価できる」）だった。
- ・その後「△△をすることで□□になるだろう」の形が出て徐々に増え始め、90年代に全体の論文の過半数に至り、現在では、わずかの例外を除いてほぼすべての論文で設定されている（図1参照）。

なおこれは、複数の府県の学校の研究紀要に共通に見出せる。また、教育実践研究を助成する財団も、報告書の原稿にこのような研究仮説を設定するように指導している。これらから、これはほぼ全国的傾向であると推測し得る。

2. 「研究仮説」の枠組みの問題

ところで、これらの仮説は例外なく検証されないことを上述したが、それは当然であると筆者は

考えている。なぜなら先の「研究対象」、「研究方法」、「研究結果の予測」という枠組みに、すでに矛盾が含まれているからである。

研究仮説を設定するのであれば、本来、「研究方法」とは「仮説を検証する方法」のことである。いいかえれば「〇〇において△△をすることで□□になるだろう」という仮説の全体を「☆☆によって」検証するのが研究である。したがって「研究方法」の記述は、「検証方法」として、仮説の外に記述されなければならない。

たとえば、問題をわかりやすくするために単純化し、研究仮説「『酸性溶液とアルカリ性溶液を(〇〇=対象)』『適切に混ぜることで(△△=方法)』『どちらの性質ももたない液体ができるだろう(□□=結果の予測)』」を想定しよう。ここで「研究仮説」を検証する「研究方法」は、「適切に混ぜること」ではなく（それも一部だが）、「リトマス試験紙を用いて調べる」等である。つまり本稿で問題にしている教育実践研究における「研究仮説」では、「研究対象」、「研究方法」、「研究結果の予測」の枠組みが間違っており、これでは仮説が検証できなくて当然である。

3. ではこのような「研究仮説」の本質は何か

ではこの仮説の設定には、全く意味がないのだろうか？ 実は、筆者は単純にそう考えているわけではない。「〇〇において、△△をすることで、□□になるだろう」という「研究仮説」は、本当はむしろ「〇〇において、△△をすることで、□□にしたい」あるいは「〇〇において、□□にするために、△△をする」という「実践課題」の記述なのである。その意味で、〇〇、△△、□□は、「研究対象」「研究方法」「研究結果の予測」ではなく、ほんとうは「実践対象」「実践方法」「実践結果の予測」なのである。

筆者は、このような仮説を設定している複数の実践者に、実際にこの点を確認することがあるが、それらの実践者は、予期しない指摘にとまどいを見せながらも、熟考の末、そのとおりで同意してくださる。

4. この前提の上でさらに問題であることは何か

しかしこのことを前提としても、このような「仮説」の設定は、「実践研究」におけるいくつかの問題を生じていると考えている。それは次のとおりである。

- ・実践課題としての、「ねらい」や「手段」が不明確になる。
- ・研究が終了した時の、研究結果の適用範囲や次の研究課題が不明確になる。
- ・仮説検証や実証的研究に対する正しい認識を損なう。
- ・実践と研究の間の概念の混乱を導く。

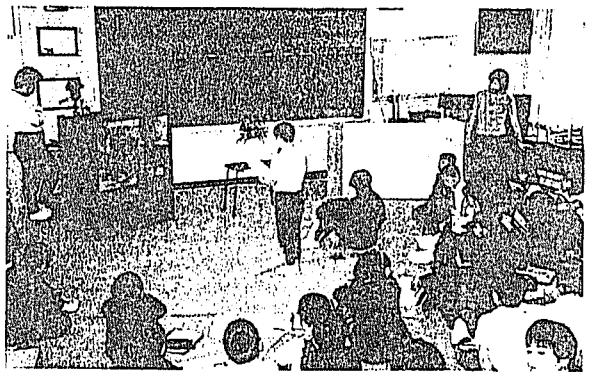
これらは、学校における実践研究の望ましい発

展とその成果の共有・蓄積にとって大きな障害となる。また、社会人特別枠の拡大等により、教員が現職のまま大学院に入学する機会は今後いっそう増えると考えられるが、その場合、大学院での、より研究的な実践研究の成立を困難にする恐れがある。

また、「実践課題」を「研究仮説」の形式で無理に表現することを、望ましいことあるいは正しいこととし、それを疑問視せず問題としない文化は、そこで働く教員の論理的な記述力や表現力、また文章作成力を、長い間に損なうと考えられないだろうか。この問題は、このような副次的な影響（side-effect）を生じる可能性も少なからず有しているのではないかと筆者は案じている。

5. この問題の背景としての科学的 研究観と教育実践の特性の不認識

ところで、このような無理な形式で、「研究仮説」という枠組みを設定することが広く行われている背景には、広く信じられているある考えが存在し、それがプレッシャーとなって働いているのだと考えることができる。それは、「研究とは『仮説検証』以外にあり得ない」という考えである。



吉野川についてテレビ会議システムを使って交流学習
(徳島県三好郡三加茂町立三庄小学校)

しかし、第1に仮説検証などの実証的研究だけが科学的研究の手法であるというのは全くの誤信であり、今日では非実証的研究手法が科学的研究手法として世界で広く認められていることを、まず理解すべきである。

また、第2に教育実践においては、ある学級で得た研究知見は、授業者が異なり、学級が異なり、単元が異なり、教科が異なれば、必ずしも適用が期待できない。このように普遍性や一般化の可能性を期待できない事象である教育を対象とする研究では、対象の具体性や個別性を重視する研究手法こそが適用されるべきである。

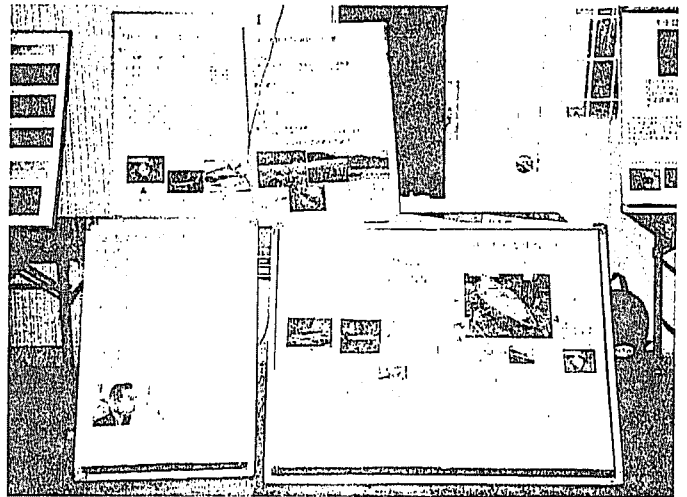
「科学的な研究とは仮説検証の枠組み以外にない」という誤った理解にもとづいて、一般性、客観性、実証性等を志向する手法の枠組みの表現を実践研究に無理に適用しようとする。しかし、それは自らの実践と適合しないので、その手続きは適用できない。そこで、表現と手続きとの間に齟齬がおきる。これが、これまで述べてきたような仮説の矛盾として現れるのだと考えるべきであろう。

6. 結論と提案

—今後の教育実践研究のあり方—

今後、教育実践研究の多様なあり方が議論されるべきであるが、以上から、筆者の立場で今後の教育実践研究のあり方を考えたいと思う。

- ・まず、仮説検証や実証以外に研究手法はあり得ないという誤信から自らを解放し、自らの教育実践により適した多様な研究手法を採用する態度をとる。
- ・そのうえで、無理に仮説の形で記述せず、実践研究の課題をより自然に表現できる記述形式を工夫し、それにもとづく研究の枠組みを採用す



吉野川のアユ漁についてを調べたパネル (三庄小学校)

る。

なお、筆者自身はこのような研究手法として、「質的アプローチ」あるいは「解釈的アプローチ」と呼ばれるものを採用している (平山 1997 を参照)。これを含めて、多様な研究のあり方を工夫し、発展させるためにも、教育実践研究のあり方についての議論を、今後いっそう活発にしていこう必要があると考えている。

(本稿は、大谷(1999)を加筆・修正したものである。)

(おおたに・たかし)

〈参考文献〉

- 平山満義編(1997) 質的研究法による授業研究 —教育学・教育工学・心理学からのアプローチ—, 北大路書房
大谷 尚(1999) 教育実践研究における「研究仮説」設定の問題の検討, 日本教育工学会第15回大会講演論文集 p.291-292